

い信仰告白により大きな位置づけが与えられるのではないでしょうか。

より身近かな問題は、自分のとっている教理的立場や生活綱領の正当性の論理的前提として聖書靈感や聖書の無謬性、無誤性を主張する危険です。このような教条主義的姿勢は互いに自分を守るために他をさばき切り捨てる不毛の論争を生みだしかねません。しかし主との交わりの中から生みだされた「聖書の言はすべて真実な神の言であって、そこには何の誤りもない。」という信仰告白は、告白者にとって、彼自身の全存在がかかった動かし難い確かさがあるとともに、自己絶対化に陥ることなく、隣人の信仰告白を尊重する柔軟さをもっているものです。隣人の確信と告白が自分のそれと同じでなくても、自分の告白を絶対化し相手をさばくのではなく、お互いの告白を尊重し、その違いを共に主の御前に持ち出して、共に主の御導びきを求める謙虚さを大切にします。そのような謙虚で確信に満ちた主を信頼する歩みを通して、主は私たちをさらに広く深く豊かな確信に導びいてくださると私は信じております。

(大阪府立大学経済学部教授)

〔論文〕

靈感の用語と概念

——用語整理のための覚え書——

舟喜順一

小論は、日本福音主義神学会の第二回神学研究会議の主題「今日における福音主義聖書論」に沿って、一九八三年十一月二八日に御殿場東山荘において、読んだものに若干手をいれたものである。「プロレゴメナ・用語／概念の理解の整理をめぐって」は、「靈感の用語と概念」と「無謬性／不可謬性／無誤性の用語と概念」とを内容としていた。フィリップ・ペイン氏による後者の論述と組になっていたので、小論は「靈感」の用語の検討にとどめた。最近の「聖書の無誤性」という用語をめぐる問題については、あえて触れないことにしたので、御了解をいただきたい。また、この種の論述は、概説的などころにとどまらざるを得ないので、細かな注をつけず、いくつかの新刊の参考文献を付記することをあつて、その代わりとすることを許していただきたい。

「聖書の靈感」、「聖書の権威」等は、聖書自体の示すことであり、キリストの教会にとって、基本的な教理の一つで

あることは言うまでもないことであるが、教会の歴史の様々な時期に、それらの意義は様々に理解されてきたこともあるので、それらの意味を明らかにしようとするには、福音主義聖書論の確立を求める私たちにとっては、必要不可欠からざると思われる。そのような努力の中で、「靈感」に関連して用いられてきた神学用語のいくつかを挙げて、次いで、私たちの理解を最もよく示す「十全靈感」、「言語靈感」について考えることを述べることにしたい。

聖書論の一環としての「聖書の靈感」を論じる時に、神学者たちは、それぞれの神学体系の中で、その位置づけをしようとするので、「靈感」論は、そのまま、その神学の基礎論、方法論を反映することになる。ある神学者が「靈感論」において、立場を変えたとか、仮説を修正するという場合は、ただ表面に現われる「靈感論」の変化だけではなく、神学上の立場の変化がそれに伴っているのが通例であると思われる。それゆえ、その神学者の発言の中の「靈感」に関する部分を断片的にとらえて論じることは、適切さを欠くことになりやすい。同一の「聖書の靈感」という用語が、さまざまな意味で用いられ、また定義をされているという状況の中で、用語の整理は私たちにとって、緊急の必要があることであるが、同時に、非常におもたい仕事である。それは、神学の方法論そのものを問題にしなければならぬからである。これは一、二の神学者たちによってなされることではない。福音主義神学会の協同の努力が要請されているところであると思う。

そのような視点からみると、以下は極めて不十分な、断片的なものであるが、今までに用いられ、扱われてきた諸用語をあげて、その位置づけをしたいと思う。

靈的体験としての靈感

日本において、「聖書の靈感」が主張されるとき、聖書を神のことばとし、その權威を認めるに当って、それが書かれるために用いられた人々、またその示す神の救いのみわざと聖書を切り離し、教理、倫理、儀式の規範として聖書を用いるけれども、そのキリストへの神の証言としての性質を認めなかったいわゆるユダヤ主義的な理解が考えられることはないと思われるが、そのような理解とともに、初代教会が警戒しなければならなかった「異教的な靈感」に似た考え方は、全くありえないと言ふことはできないと思われる。

いわゆる神がかり状態になって、忘我的恍惚の中で、靈のことばを語るとか、文字を書くというような靈感現象に特殊な宗教的な感動、体験のことである。日本では、現代においても、巫女の口寄せのようなことが行われており、また、ほとんど靈的な力を失い、合理化されてしまっているにしても、託宣に類するものが社会的に許容されているのが現状である。うらないやおみくじも文字で書かれている。天理教や大本教のような、民間の俗信とは言えない宗派神道においては、お筆先と言われる、教主によって書かれた神の詞がある。

このような靈感された文字は、書かれたもの自体が神聖なもの、靈力をもつもの、人が手を加えることは許されないものである。正常な人間の努力や思考の関与が全くないと認められることこそ、宗教的価値を高めることである。日常的な生活では全く価値を認められない、非合理的な、神秘的なことが、その内容いかんにかかわらず、靈的体験というヴェールのゆえに、恐れられ、信じられる。

聖書の靈感はこのようなこととは全く異なることであり、聖書自体が、明らかに靈媒やうらない、まじないを禁じ

ているので、福音主義キリスト教の立場に立つ者が、このような考えの影響を受けることは、考えられないことである。

しかし、日本的な文化、伝統の中に育った者として、そのような靈的權威に対して臆病であったり、聖靈によらない、異なる靈による預言の賜物と思われるような体験がキリスト教会の中にさえ見られることがあったりするといふことは否定できない事実である。

聖靈による神のことばである聖書よりも、自分の靈的体験や靈的指導力を重視するような指導者、牧師があるとすれば、そのような事態が放任されることもある。聖書はそのような靈的体験をえた者には、重要でなくなり、体験が優位におかれるとすれば、そこでは、多くの宗教に見られる直接的な神秘主義、あるいは神秘的知識が重んじられていることになる。

すべてのキリスト者が毎日に聖書を学び、みことばに信頼するように互に励ますことはキリストの教会にとって必須のことであるが、それは、神のことばである聖書が人のことばをもって記され、すべての人に開かれているという面があることによって可能である。特定の教師、指導者のみを通して、また特定の集会によってのみ、靈的な祝福が豊かに与えられるので、それらに頼るという心情のあり方は、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせる聖書の与える知恵を正当に扱っていないことを示す場合もありうると思われる。聖書の積み明かしとは無関係の別の方法による靈的感動の高揚は、聖靈の満たしではなく、異教的な宗教感情の満足であるかもしれず、いわゆる「日本教」のキリスト派的様態の顕現に陥る危険をもつ。

また特定の靈的体験をした人またはその中で語られ、書かれたことばを、それとして、神聖視して崇めるならば、また聖書を読まないで、なお聖書を神聖な書として尊ぶならば、そこには、まさに聖書崇拜、聖書を対象とする偶像礼拝が行なわれることになる。

日常的な生活と宗教的な靈的体験とを切り離して、後者の追求に信仰の本質を求める傾向が教会の中にも侵入しようとしたことは、聖書の中でも警告され、教父時代の様々な聖書観の中にもその反映が見られるのであって、日本だけに限ったことでなく、むしろ、あらゆる時代の、あらゆる地域での宣教の歴史の中で経験されたことではないかと思われる。

機械的靈感説

「靈感」を、神秘的な靈的体験とするならばそこでは、聖書のことばの人間のことばとしての性格は、実質的に無視されることになるが、それを避けながら、人のことばで書かれた聖書が神のことばであることを強調しようとしたのが、教父時代のいわゆる「笛吹き説」、「琴弾き説」のような「聖書の靈感」の理解であろう。明らかに人のことばで書かれている聖書を学び、みことばに従おうとしていた人々が、聖書を異教の場合のような靈力をもつことば、文字の書とみたとは考えられない。聖書の筆者たちが全く神の御支配の下にあったことを、そのように表現したのである。しかし、たとえ聖書の神のことばとしての性格を強調するためであったにしても、聖書の人間のことばとしての性格を極度に圧縮するような比喩を使ったこと自体、その教父たちをとりまく環境が異教の影響下にある社会であったことを思わせることである。

口述筆記説は、笛吹き説よりもさらに人間の参与を排除する考え方である。聖書が神ご自身の作であることを強調するための説明ではあっても、やはりその背後には人間性を低く見る考え方があって、聖書の人間性を無視した所

に、神のことばとしての性質を強調しようとする傾向がある。現代の機械的靈感説、タイプライター説、ダイクタブ

オン説などという表現で批判される考え方も、結局口述筆記説的な、「聖書の靈感」理解であると思われる。

逐字靈感説というものが実際に主張される場合があるとするなら、それは口述筆記説と同じ主張の、書かれた文字に視点を置いた表明にすぎないと言えよう。ヘブル語の母音記号までも靈感されたとするような考え方は、この説に近いものとしなければならぬと思われる。この考え方は、聖書の神言性の強調を意図しながら、かえって逆の効果を生み出すことになると思われる。逐字というときに、書かれた字の字体にまで、神の直接指導があったとするなら、それは、笛吹き説や機械的靈感説よりも、むしろ「お筆先」に近いことを主張することになるであろうし、また、最初に書かれた文字が消失するのなら、もはや靈感された文書は存在しないことになるであろうからである。またことばを記録する文字の過度の重視は、書かれた文字自体に内在的な霊力を持たせ、その神聖性を認めることになるであろう。このことに関連して、注目すべき聖書の引照箇所は出エジプト記三二章一八節から三四章二八節までと、エレミヤ書三六章である。出エジプト記によると、神の指で書かれた石の板を、モーセは、イスラエルの民の罪を見たとき、投げ捨て、砕いてしまった。しかし、その字は神の字であるものを砕いたこと自体は、神への罪とはされず、後に、前と同じことばを書きしめた同じような石の板が与えられている。エレミヤ記でも、ユダの王エホヤキムが焼いた巻き物にあったことばが、改めて書きしめられた。それは主の命じられたことであつた。神のことばは文字をもつて書かれるが、文字とともに滅びることはなく、再び同じことばを書くことが、神によって命じられることがある。という事実は、「聖書の靈感」について学ぶ者が留意すべきことであらう。

“verbal inspiration”を逐字靈感と訳し、それと同一視することはできないということは、次に逐語靈感説について述べる中で明らかになると思う。

逐語靈感説

日本において、英語の“verbal inspiration”の訳語として、「逐語靈感」を採用の人が多い。この訳語を使用する人は、この説の支持者の中にもいるが、むしろ批判者の側に多くいるようである。その人々は、前述の逐字靈感説に向けるべき非難を、逐語靈感説に向ける場合もある。

この“verbal inspiration”を私たちは「言語靈感」と訳し、「逐語靈感」という言葉に結びつけられやすい要素主義的な言語理解と一線を画したい。「言語靈感」については後に述べることにして、まず「逐語靈感」という用語について述べることにするが、事の性質上、同時に両者について論じることになる場合もある。“verbal”は「オクスフォード・コンサイス・ダイクショナリー」によると“of, concerned with words”であり、その使用例として、ここで取りあげられている“verbal inspiration”があげられている。他の意味も出ているが、翻訳に関する用語として「文字通りの」、「一語一語の」があげられている。「逐語訳」という場合のことである。それゆえ、「逐語靈感」という訳語は、決して無理な訳ではない。しかし、「verbal」の基本的意味は「ことばの」とあることから、「言語靈感」あるいは「ことばの靈感」という方が適切であろう。

「逐語靈感説」は「口述筆記説」と形式的に似ている。また事実上同じことを表わす別のことばであるとされることもある。しかし、「逐語靈感説」は聖書筆者に使用することばの選択、その他の自由を認めないのである。聖書の導きの下にあつて、聖書筆者が、一語一語について、ことばを慎重に選び、正確に書き記したということと否定することはない。「口述筆記」の場合には、そのような余裕や責任はないはずであるから、この二つの用語はやはり区

別すべきであろう。

さらに、逐語靈感の場合は、逐字靈感の場合と異なり、最初に書かれたもの (autograph) が失なわれることによって、靈感されたものが消失すると考える必要もない。正確に書き写されたコピーは、またその同じことばを表わす文字で記されているからである。このことは「言語靈感」についても言えることである。このことは本文批評の意義 autograph について論じることの意義を認めるための一つの論拠になると思われる。

逐語靈感説をとる人々の主張は、言語が語られ、書かれる場合、必ず文には語の配列があり、前後の関係があり、構成があるので、聖書筆者は、それらすべてに関して、聖書の指導下にあり、その中で語を選んだのだということである。聖書の指導は、機械的ではなく、筆者の人格、語彙、語感を無視することなく、神が人に示そうとされることを正確に誤りなく記させたということであって、「逐語靈感」だから、「機械的靈感」だというのは当らない。

「逐語靈感説」は「思想靈感説」や、神秘主義的な「靈感」理解とちがって、聖書自体が、直接神の指導の下で書かれた人のことばによる文書であって、人々にとって、客観的な文書、学ぶことのできる文書として与えられている神のことばであることを主張する立場の表明であると思われる。聖書筆者が、瞬間的な、あるいは一過的な、神との出会いにおいて、靈感を受け啓示を与えられたことを、後に書き記したというような神秘的「靈感」理解や、ひらめきの中で、思想ないしは啓示内容の要旨が伝達されたものを、自分のことばで書き記したというような「思想靈感説」、あるいはそれらの啓示を受けて後に、その証言として、それぞれの筆者の言語能力と敬虔さをもって伝えるべきことを文にまとめ、語り、また書き記したことに「靈感」が加えられることを認める実存主義的な理解などに対して、聖書筆者の書くことばそのものに、聖書の指導があったことを主張するのが「逐語靈感説」の真意であろうと思われる。

この理解のもとでは、聖書は「靈感」によって成立した段階において、客観性を保有するので、読む者の言い換えや、改訂、編集、再編成などは許されないこと、その時、そこにおいて起った一回性をもち歴史的な文書として認められなければならないことが、主張されることになる。また、それらは、人々の理解できることばで書かれ、理解や受容を要求するものではあるが、理解されず、受け入れられないことがある場合、人が理解しないことによってその価値、その意味がなくなるのではなく、そのことばは、その時ばかりでなく、後々までも、神のことばとして残る。聖書はそのような聖なる文書であるという主張が強力になされることになる。これらのことは、後に述べる「聖書の言語靈感」という用語についても、同様に明確に言えることである。

逐語靈感説の長所は十分認めなければならないが、この説の弱点は、その名称にある。ことばを個々の単語に強調点を置いて理解すべきであるかと言うかのような印象を与えるからである。またこの説は「口述筆記説」的な理解をもいれる余地を残しているのも事実であろう。その場合は、人間の言語で書かれているという聖書の性格を極度に軽視するものとして、それを、ドケイイズムの聖書観、として非難されても答えられないということになる。

また現実の問題として、逐語靈感説を採ると主張しながら、その主張の現実内容について責任をとらず、聖書の權威を高揚するための標語、聖書信仰への心情的熱心さを示す用語として、このことばを掲げるようなことがあるなら、逐語靈感説は、神学用語としての役目を奪われることになり、また聖書信仰は、聖書の偶像視と同一視されることにもなり、ことばの混乱を招くことになる。確かに「逐語靈感」という用語が誤用されるときには、"verbal inspiration" を非難する学者の指摘することが、当を得ているとしなければならぬような場面も生ずることがあるであろう。しかし、「逐語靈感説」の言おうとすることを聞こうとせず、聖書自体の靈感された性質を認めることは、そのまま機械的靈感説に通じるかのように批判することは、当を得ないことと思われる。自分たちが、聖書本文

を、機械的靈感説的に扱った場合に、問題と感ずることをもって自らのイメージによる「逐語靈感説」「言語靈感説」を非難するための根拠としている場合が多いからである。また他方、誠実な学者が頭から「逐語靈感説」を拒否しながら、実は、逐語靈感説の主張することを別のことばで主張するということもあるのではないかと思われる。用語／概念の整理がここでも必要とされる。

しかし、そのような「逐語靈感説」への非難の背後に、近代主義的な、人間主義的な方法論の上に築かれた聖書学の成果とされる事柄への一面的な信頼がある場合は、事態は単なる用語の整理によって打開されるようなものではなく、最初に述べた、神学の基本的な方法論にかかわる検討がなされる必要が生じる。

そのような状況の中で、様々な神学的努力が積み重ねられる中で、「聖書の靈感」という用語にも、かつてなかったような負荷が与えられ、混乱が生じているということもできよう。その中で、私たちは「言語靈感説」のもつ積極的な意義を探りたいのであるが、その前に、近代主義的な、あるいは啓蒙された人間の側からの「聖書の靈感」についての考え方にふれる必要があると思う。

合理主義的「靈感」の理解

神の側からの、人間への働きかけによる啓示、神を知ることをゆるすための働きを認めないという基本的な立場からは、「聖書の靈感」は、今まであげてきたどの靈感説をとるにしても、意味のないことになる。聖書も結局、人間の宗教心の所産であり、誤りのある、限界のある人間の側から書かれて以上、多くの文書の中で、最も優れた道徳的価値、宗教的洞察をもつにしても、それ以上のものではない。靈感を認めなければならぬとすれば、

それは人間の持つ宗教的感動、直観、精神的体験において、通常の人と異なるすぐれた才能をもつ特別な人物の言動に求めなければならない。聖書の中には、そのようなすぐれた人物の他の人々に靈感を与える言動が記されている。現代の合理主義的な人間にとっても、聖書のそのような靈感された部分を認めることは容易にできる。また聖書に特別な宗教的価値を認める人々は、自分や自分の生き方と関係なく、聖書の価値を云々することができる。聖書は玉石混合であっても、そこに比類のない宗教的真理が含まれ、それは人々に宗教的体験を吹きこむ。このような「靈感」は、音楽や絵画が作られる時の靈感、またそれが他の人に与える感動と同種の生来の人間の経験の範囲に収まることである。

そのような「靈感」が特定の部分にでなく、聖書の宗教思想全体に認められ、聖書の成立を人間の文化の高貴な所産として認めるということもあろうが、いずれにしても、聖書全体が、神のことばであるという理解は、この立場と相容れないものである。

部分的靈感説

聖書の部分靈感説や思想靈感説が、聖書全体の神のことばであることを主張する「逐語靈感説」、「言語靈感説」と相容れない面をもつのも、このことと無縁のこととは思われない。それらの説は、「聖書の靈感」を全面的に否定はしないが、聖書のもつ人間の側としての性格から聖書に誤りがあることをゆるさなければならぬという発想と、近代聖書学が事実聖書に誤りがあることを明らかにしたという理解のもとで、誤りを聖書のみわざに帰することを避けて聖書の誤りのない部分または面にのみ靈感を認めようとしたものと考えられる。部分靈感とか思想靈感の他に、靈感の働きに程度の差を見ようとする態度、ことばと切り離れた意味内容の靈感を認める立場、ことばを通して、聖書の目的が果される働きに靈感を認めようとする立場などは、近代的な聖書学の圧力の下で、なお「聖書の

「靈感」を何歩か、後退したところで守ろうとした努力の結果であったのかも知れない。しかし、究極的には「聖書の靈感」を無意味とする、近代的な学問の方法論の延長線上にある近代的聖書学の方法論を批判し、その位置づけをすることを怠ったことが、これらすべての妥協的な靈感論の生じた遠因であると思われる。同じ方法論をとり、同じ土俵の上に立つのであれば、福音派の上にも、近代的な聖書批評の圧力は大きく、のしかかることは避けられない。しかし聖書以外のところに聖書批評の原点を置くことをやめ、聖書自体の示す方法論を求めるならば、状況は変ること確かである。私たちはいたずらに「聖書靈感の概念の縮少」(J・パッカー)をするべきではない。

オルガニック靈感説

聖書の人言性、そしてその可謬性を承認しながら、しかしなお、聖書筆者への最初の「靈感」、あるいは照明を与える啓示の行為を認めようとする考え方があつた。これが前述の部分的靈感論によって代表される型の「靈感」論と異なる点は、それらが「靈感」と「誤り」を互に相容れない事柄とするのに対して、神の啓示に対する、誤りを含みうる人間の誠実な証言に最初の靈感を認める立場をとるといふ点である。この種の照明は、筆者たちに道徳的、靈的洞察を与え、彼らの著作を、人々に感動を与えるものとし、また「神のことば」を人々に伝える道具とする。しかし、そのことは彼らが実際に書いたことすべてに神学的、歴史的な信頼性があることを保証するものではない。むしろ、神は、聖書筆者の誤りを妨ぐことではなく、あるいは部分的に誤りを妨ぐことではなく、人間のことは可謬性にもかかわらず、あるいは人間のことは可謬性を無視して、なお聖書という神の啓示への証言を読む者に、奇跡的な「靈感」を与え、聖書がそのとき神のことばとなるような働きをされる。このように、一回限りの「聖書の靈感」ではなく、有機的に働く「靈感」を認める靈感論は、オルガニックな靈感論と呼ばれる。

このような靈感論は、近代的な学問の方法論の基礎としての認識論を捨てないで、なお、人のことばによる神からこのことばの権威と無誤性を何らかの方法で認めようとする努力によるものと思われるが、後に述べる「言語靈感説」において、靈感とともに認められる「聖書の照明」をも、「靈感」の中に組み入れようとしている点で、この靈感論は、靈感の概念の形式的拡張、実質的縮小を行なっており、その結果神の行為を強調しながら、かえって、個々人の受容に決定点を移し、神秘的靈的体験を、すべての人への神のことばとしての客観性よりも強調することになっていふと思われる。機械的靈感説による「靈感」の概念化に対して、生きた聖霊のみわざを強調する必要を感じる多くの人々によって、このオルガニックな靈感論は、新鮮な努力として、評価され、その影響下で、福音主義神学の営みが進められることを期待する動きも有力であるが、私たちは、そこには多くを期待することはできず、むしろ近代的な学問の方法論そのものの批判こそ緊急の課題であり、そこにより多くの学びを期待することができるのではないかと思う。

言語靈感と十全靈感

そのようなことを配慮しつつ、次に、聖書の自証している「靈感」を出発点とする「聖書の靈感」論として、「言語靈感」、それに伴う「十全靈感」について述べることにする。

聖書が聖書自らの意味での靈感を、その事実をもって、またそのことの直接の主張をもって明らかにしていることを、私たちは信じ、また認める。その「聖書の靈感」を聖書に基づく他の教理と同様に、聖書の釈義、解釈の中で明らかにすることは、私たちの務めである。それは福音主義神学の名においてなされるにふさわしいことと思われる。

その場合、そこで明らかにされたことと異なる結論の提示、疑問の提出があり、その考えがキリスト教会において

容認され、採用されるおそれがあり、また一部にでも事実それが認められるならば、私たちは当然なせそのようなことが可能であるのかについて検討しなければならない。そのためには、積極的な努力が必要とされることは言うまでもない。また、それらの主張が明らかに聖書の自証に反するものであることが、気づかれるならばそのことを確かめ、またそれと戦うことが必要になる。他方、もし私たちが聖書の自証と判断したことが、私たち自身の聖書の偏った理解、または一面的な理解によるものであることが明らかにされるならば、私たちは、自分たちの伝統や立場に固執するのではなく、聖書自体をより正しく理解し、「聖書の自証」によって、私たちの神学を方向づける努力をしなければならぬ。

事実キリストの教会は、世々にわたって、そのような戦い、そのような神学の営みを続けてきたのである。聖書の自証することが何かについての理解の相違が教会の告白に影響を与えることもあったと言つてよいと思われる。また、聖書以外の権威、様々な宗教、哲学の強力な影響の下で、聖書の自証するところを明らかにしようとする必死の努力がなされたこともあったと言えよう。教父時代、そして宗教改革時代は、特に、今私たちが主張する「聖書の靈感」の教理が確立されるための努力が集中された時期であると思われる。

そして今、私たちは、近代主義的な人間中心主義⇨人文主義⇨合理主義的な学問上の方法論が、聖書自体の研究に採用されることが本格的になり、教会の「神学」の流れを大きく変えようとする状況の中で始まった一九世紀以来のきびしい戦いの中にあるのである。私たちは、特にその時代の聖書批評学と意識して戦ったB・B・ウォーフィールド以来の福音主義者たちのたゆまぬ努力が、様々な研究上の悪条件にもかかわらず、一定の業績をあげてきたことを覚えていいる。日本においても、福音主義神学会が設立されたこと自体が、この戦いの重要さを裏書きすることであると思われる。

既に述べた「靈感」に関する様々な用語の出現は、このような戦いの中で、神学者たちの対応の仕方から生じたものであると言えよう。聖書の自証する「靈感」の主張を後退させつつも、教会の伝統的遺産としての「靈感」の用語を自らの側につけようとする動きの中で、神学用語自体も多義的になり、そこに混乱が生じたと言えよう。

他方、根本においては、人文主義的な方法論を捨てていなくても、教会外の世界の思想や学問も、一九世紀的なナイーブさを捨て、多様化し、相対主義的な、許容的なものになってきているようである。宗教学の面から、言語学の面から、聖書本文をそのままとして（他のあらゆる文書についてと同様に）、研究すべきであるとして、聖書以外の基準を聖書学にもちこむことの不毛さを指摘する動きも出てきている。

しかし、今はこれらのことは措いて、「聖書の十全靈感」、「聖書の言語靈感」を私たちの立場を示す用語として認めることに進まなければならない。福音主義神学会においては、「聖書の十全靈感」または「完全靈感」という用語の使用については、意見の一致があることは、その規約によって明らかであるが、「言語靈感」は、ある人々にはなじまない用語であるかもしれない。福音主義者の間でも“verbal”を「逐語」と見て、その弱点を警戒して、その積極的な意味を見逃がすこともありうるからである。しかし、私は、「言語靈感」という用語を「十全靈感」とともに用いることによって、聖書が自証していることを表現するために、また福音主義諸教会の用いてきた「聖書の靈感」を、現代の状況に即する装いをもつことばとして用いることを提案したい。“verbal inspiration”を逐語靈感と訳して、その弱点のみ取り上げる批判者に対しては、むしろ積極的に、その意味を説明し、人間のことはで書かれた神学のことばである聖書の意義を明らかにする努力をすべきであると思う。「十全」とか「言語」は古くから教会の神学用語である「聖書の靈感」を、現代において確保するための修飾語であって、新しい概念を表わすためのものではない。「聖書の靈感」という伝統的な用語をそのまま用いながら、「靈感」を別のものにしようとする動きに適切に対処

するための新しい付加語なのである。

「十全靈感」は英語の“plenary inspiration”に対応する日本語として用いられているが、“plenary”と云うことは「オクスフォード・コンサイス・ディクショナリー」によれば“entire, absolute, unqualified, fully attended”であり、小学館のランダムハウス・英和辞典によると、「十分な、完全な、全部の、絶対的な、無条件の、全員出席の、すべての手順を踏んだ。正式の、」等の意味をもつ形容詞である。靈感が十全(plenary)であるというのは、どのようなことだろうか。靈感の程度が完全であるということだろうか。異教的な靈感には程度の差が認められるのに対して、「聖書の靈感」は十全であるのか。しかし「聖書の靈感」は聖霊のみわざである以上、靈感の質とか程度と云うようなことは、問題にならないはずである。「十全靈感」は事実上、「部分靈感」に対する用語として用いられているのであるから、聖書全体が聖霊のみわざによって記されてきたことを示す「聖書の靈感」をより強調するための用語とみてよいと思う。

言語靈感

言語靈感について言うべきことは、逐語靈感の項で多く述べたので、それらと重複しないことについて述べる。

すべての人が理解できるような言語を用いて、神の深みをまで探られる聖霊は(Ⅰコリント二・一〇)、また、人間の心を探り窮められる方は(ローマ八・二七)、人類の救いのために、様々な啓示を与え、特にことばをもって、その示そうとされたことを表現された。神の被造であり、神の恩恵を受けながら、それを認めず、感謝せずに、罪の中にことばを乱した人類に対してである。聖書はその啓示の特別な一様態である。神は、聖書によって人に知恵を与

え、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることをよしとされた。また聖書は教えと戒めと矯正と義の訓練の働きをすることによって、神の人を整え、神のよしとされる働きをさせられる(Ⅱテモテ三・一五―一七)。神学の営みも、聖書のことばによってのみ可能とされ、神のみこころの正しい理解と提示という目的を果しうると言わなければならない。聖書の靈感の事実が、そのことを可能とするのであって、「靈感の教理」が、聖書のことばが神から出たことを表わさない内容をもつ用語とされるなら、聖書に基く神学の営みの全ては根拠を失い、再構成を要するものとなるであろう。

聖書の理解、あるいは正しい解釈は、肉的な理性に頼ってでなく、聖霊の照明に依存してなされるのであるが、そのことは聖書のことばを信頼し、それを正面から学ぶことには不可能である。聖書を他の基準に照らして研究することでは、聖書自体を正当に扱える保証は与えられない。

聖書は教会の専有物、教会の作品ではなく、罪びとのための神の救いの書であるのであって、信仰者にだけ「神のことば」となるものではない。聖書は、すべての人に開かれたことばをもって記されている。しかし、そのことは、学ぶ者がそれぞれの主観的な立場で聖書の中から真理要素を引き出し、そうでないと思う要素は捨てるというような操作や、他の宗教文書と並ぶ資料として扱うことを許すことではない。聖書が、客観的な文書であり、プロポジショナルな啓示であることは、特定の方法論によって、聖書のすべてを理解しつくすことはできず、絶えず聖書のことばに帰って、聖書自体をより正しく、より全体的に理解するための努力を人々に要求することを示す。

「聖書の靈感」の教理も、そのような聖書自体の学びによって把握されたことであるので、他の聖書に基く諸教理と密接な関係をもっている。残された紙面で評述はできないが、創造論、人間論、罪論、救済論、キリスト論、教会論、終末論等の神学の諸科目のすべては「聖書の靈感」すなわち、人間のことで書かれている聖書が神のことばで

あり、それゆえの権威をもつということが、信じられるか否かによって、大きな影響を受けることは明らかである。そのようなことについて、気づかされているいくつかのことを次に述べたい。

聖書は、神が、罪のゆえに限界があるだけでなく、さらに混乱している人間の言葉を用いて、人に、ご自身がわからせようとしておられることを、そのようにみこころになんて受けとることができるように、筆者として選ばれた人を導き、そのことばを選ばせ、それぞれの時代に、それぞれの状況において書かせられたものが、積み重ねられたという性格を持っている。そこで用いられている語彙や文による表現は、それぞれの時代や文化に属するものでありながら、神が人の思いを超えた神のみこころ、神のみわざを示すゆえに「新しい意味」を与えられている。それゆえ、それらのことばを謙虚に受けとり、学び考え、自らに当てはめるときに、その聖書のことばは、聖霊の照明によって、光を放ち、その人はその「新しい意味」をさとることを許される。神より出たことばとして「古いことば」が、そのまま用いられつつ、「新しい意味」をになう「新しいことば」の性格を与えられている。聖書のことばは、「人のことば」であるが、神の霊感によって選ばれたことばとして、その書かれたことを、その文書の性格に沿って、そのまま、読むことができる。誤りや人間的な作為を警戒しながら、聖書の中から真理要素だけを拾い出すようなことや、人間のことばの中から不可謬の真理を探すというような操作を必要としないのであって、だれにも、人に理解可能な範囲のことばを読むことによって、神のことばを読み、神の伝えようとされることに導かれ、それを受けられ、それに信頼を置くことができる道が開かれているのである。

また、聖書において記録され、解釈を与えられている事柄の中で、特に特別啓示として神学上識別されるような事柄も、一般啓示と遊離した特別の秘密として示されたわけではなく、神の救いの御目的によって、歴史上の出来事として、みわざがなされ、その意味目的が示された事柄であるので、神の「救いの歴史」を、現代の科学や歴史学が対象としうると考え、その視野において、批評したことを切り離して構成するような必要はない。むしろ、その批評の結果誤ちと言われたことが、どのような判断基準に基づいて誤ちとされたかを確かめ、その判断基準を、聖書的な判断基準によって位置づけることが必要である。聖書自体のことばの用い方を十分に知ろうとすることを怠って、近代的な方法論に基づく「学問の成果」をもって、聖書をさばくことは、現段階における科学の知見をもって、聖書の記述の真理性を証明できるとしたり、誤りを立証できるとすることであって、根本的な方法論的な誤ちを含むことである。聖書を様々な方法をもって、様々な検討をする人々を拒否する必要はないが、それらが、それ自体の方法論、枠組をもつ限界のある操作であることを忘れるならば、その成果を無批判に受けいれて、神を信じつつも、神の造られたものについても、神の与えられた救いのことばについても、神が人々を与えようとされる知識に達することはできないこととなる。聖書を人間の単なる好奇心、研究心の対象とした学びに依存することは不毛と言わなければならぬが、しかし、そのような学びの中でも、聖書のことばそのものを正面から受けとってその意味を探ろうとするならば、聖書のことばによって、聖霊の照明のみわざを受け、真理に導かれるということもありうるのは、聖書を霊感された神の知恵ということがゆるされるであろうか。また、聖書が、その中で、神のことばに付加したり、それを除去したりすることを禁じる言明を、所々で言明しているのは、「聖書の霊感」にふさわしい事実であると思われる。聖なる神が、啓示の方法として用いられた特別な意味をもつ「人間のことば」に、人間が手を加えることは、すべての人に許されないことである。聖書の言語霊感の主張するところを理解する者は、特にこの点において恐れをいだく必要があると思われる。最近の福音的な立場に立つ人々によって行なわれる聖書翻訳には、人間的なわかりやすさを求めるあまりに、この戒めを犯しているというようなことはないだろうか。私たちは、さらに、次のことも考える必要があると思う。聖書自体が、今の世（私たちキリスト者をも含めて）には示されず、キリストの再臨によって明らか

にされるべき事柄のあることを明示していること、また聖書のすべてを「人の力」だけで、人にわかるように言い直すことはおそらく不可能であるという、聖書の神のことはととしての性質のこと、また神はご自身を隠す方でもあること、また、神が与えられたことは人を手に解釈して、神の明らかにしようとしておられることをかえって隠し、みこころを曲げてしまふことは許されないということなどである。これらのことは、いわゆる「アコモデーション」に関連して学ぶべきことであるが、そのためには別の機会を得たい。

「聖書の言語靈感」という用語を、以上のような視点から、確立するためには、他にも多くの取り上げるべき事柄が、残されている。聖書の言語表現の特徴についての実証的な学びもその一つである。しかし、すでに時間的な面でも、紙数の面でも、許される限界に近づいているので、そのためには別の機会を得たいと思う。

以上、極めて不十分ではあるが、「聖書の靈感」に関する用語の整理を志しながら、「聖書の言語灵感」が、聖書の自証する「聖書の靈感」を明確に提示するために最もふさわしい神学用語であり、それは「十全靈感」とともに用いられることがふさわしいことを述べた。

私たちは、福音主義神学のあらゆる分野でこの「聖書の靈感」に関する聖書論をも含めて、聖書自体の言明を重視し、聖書自体の提示すると思われる方法論を、自覚的に探り求めることが必要とされていると思う。私たちが時代の子弟であって無自覚の中にも、現代思想や哲学の背景にある聖書と異質の方法論をとり入れ、あるいはそれに影響されつつあることと、そのふさわしいこととを述べた。

参考文献 (一九八〇年以降のもの)

- J. I. Packer, *Beyond the Battle for the Bible* (West Chester: Good News Publishers, 1980).
 Paul Ronald Wells, *James Barr and the Bible* (Phillipsburg: Presbyterian and Reformed, 1980).
 John D. Woodbridge, *Biblical Authority* (Grand Rapids: Zondervan, 1982).
 I. Howard Marshall, *Biblical Inspiration* (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1983).
 P. A. Carson and J. D. Woodbridge, eds., *Scribure and Truth* (Grand Rapids: Zondervan, 1983).
 Gordon Lewis and Bruce Demarest, eds., *Challenges to Inerrancy* (Chicago: Moody Press, 1984).
 Moses Silva, *Biblical Words and Their Meaning* (Grand Rapids: Zondervan, 1983).
 Earl Radmacher and Robert Preus, eds., *Hermeneutics, Inerrancy, and the Bible* (Grand Rapids: Zondervan, 1984).
 Richard J. Erickson, "Linguistics and Biblical Language: A wide-open Field", *Journal of the Evangelical Theological Society* Vol. 26 (1983), 257-263.
 Stanley Obitts, "A Philosophical Analysis of Certain Assumption of the Doctrine of Inerrancy of the Bible", *Journal of the Evangelical Theological Society*, Vol. 26 (1983), 129-136.
 Winfried Corduan, *Handmaid to Theology* (Grand Rapids: Baker, 1981).
 H. N. Ridderbos, "The Inspiration and Authority of the Holy Scripture." in D. K. McKim, ed., *The Authoritative Word* (Grand Rapids: W. B. Eerdmans, 1983).
 Norman Geisler, ed., *Biblical Errancy. An Analysis of its Philosophical Roots* (Grand Rapids: Zondervan, 1981).

(聖書回教金教団)